
悪魔召喚師 3

黒狐由意

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔召喚師3

【Nコード】

N76960

【作者名】

黒狐由意

【あらすじ】

人に憎まれること、憎んだ結果とは。

随分大規模な古本市だ。道の両側をずっと店が続いている。あたりには沢山の人。過去を探している人が多いのか若者より年の行った人の方が多いようだ。

ちよつとちよつと、

私は振り向いた。またなのか？同じように声をかけられるのは、と思ったのだが周辺に私を見ている人はいなかった。ただ一軒の店の中心に赤い本がくつきりと見えた。

私は本を取り上げた。赤いハードカバーの本などどこにもなく、とりあえず手にとったのはただの薄汚れた本だった。

私は試しにそれを開いてみた。そして閉じた。

再び開いてみる気もせず、商品の山にそれを戻した。

『買わないのかい？』

親しげな思考が頭の中に届いた。

おやおや！トラブルの時は現れず、こんなときにばかり声をかけてくる、あなたはなんなんですか？

私はプリプリと怒った口調の思考で切り返した。

『もう一度それを開いてみるといい』

でも……。

私は嫌々商品の山に戻って本を拾い上げた。

開くとしても読む気になれないような汚れで本は染まっていた。

『ほら、それだ』

私は彼がそう言ったときに開いていたページに目をこらした。真っ赤な炎があがっている絵が写真で、中央に人型があった。

『それが何か分かるかい？』

さあ……？なんです？

『我々はそれを御使いと呼んでいるよ。御使いと言うと神の使い、

つまり天使を示すものだがこの場合はそうではない。他の呼び方が決められていないのでね』

私はとあるいかがわしい店に来ていた。店内は薄暗く、うず高きつしりとあちこちに積まれた商品は全て訳の分らないものだらけだ。そんなに狭い場所なのにテーブルと椅子が置かれ、客が腰を下ろしてなにか飲みながら、あるいはふかしながらぼそぼそと語り合っている。薄汚そうではあるが、店には独特の香りが漂っており、それがこの場所の正常を保っていた。

薄暗い壁にはポスターのようなものが貼られている。それはぼんやりと顔の輪郭を赤く浮かび上がらせた細工された人の顔の絵のように見えたが近づくとき赤だけで表現された人の顔の写真と分かる。下に得体の知れない字で何か書き込まれている。

「いらつしゃい、香が切れましたか？」

とても小柄な顔中を包帯でまいた店主が尋ねてきた。

「いえ、これなんですけど。今日買ってきたんですが」

私は放置された椅子に座りながら先刻やむなく買ってきた本を差し出してみせた。

店主は本を受け取り、開かずまず臭いを嗅ぐような仕草をしてみせた。

「ふんふん、これがどうかしましたか？」

店主から本を受け取ると私は注文した。

「魅惑のカクテルを下さい」

「はいはい」

店主は奥に消えた。

店の中をどかかと乱暴に歩く仕草があった。

かなり長身な男に見えた。髪は長く、後ろで結っている。帽子をかぶっていた。

彼は先刻の壁のポスターの前でとまり、唸っていた。

「どうかされましたか？」

私は彼に声をかけた。

男はちらりと私を見た。目が緑にキラリと光ったが、茶色の平凡な瞳にも見えた。

「これが見えるのか、なるほど。勿論凶悪犯だよ、捕まれば死刑は確実だな」

私は先刻の得体の知れない字がよめなかったので顔写真が誰を示すのか詳しく分からなかったが、彼の言葉を聞いて頷いた。

「その人は何をしたんですか？」

「契約違反だよ」

「なんのです？」

彼は私に向き直って言った。

「なんのつて君はよく知っているはずだろう。悪魔と人間の契約だよ。この人間は悪魔と契約して報酬を渡さずに逃げ回っている」

「そんなおかしな話、初めて聞きました」

私は男に微笑んでみせた。

「笑い事ではないのだ。契約した時点で渡すものをもう持っていないかったのだ」

「どちらにしても悪魔がそれを見抜けないのはおかしな話です」

「そうなんだよ、つまりこの人間は只者ではないわけだ。その手口で詐欺の契約を重ね続け、人間の身でありながら、複数の悪魔を支配しているらしい」

「仮に報酬が魂としてですが、一つしかないそれを何故何度も契約の対象としてぶら下げる事が出来るのでしょうか」

店主が戻ってきて、注文の品を置いていった。

血と魂の甘い匂いのする飲み物とガスのようなものがビンに閉じ込められている。

男は眉を顰めて私を見守った。

瓶の蓋を取ると自由になったガスと液体は命じられたように私の喉

へ消えた。

「美味いかい？」

男は複雑な表情のまま尋ねた。

「近頃は普通の食べ物は不味く……まあこんな感じです。貴方がたの食料はどんなものなんです？」

見られたのだから開き直りながら私は切り返した。

男は肩をすくめた。

「我々の食べ物は……いわゆる太陽だ」

男は隠語で言って、首を振った。

「もういかねば。君も詐欺師には気をつけるんだな」

男は足早に出口に向かうが、その足音は鳥の羽ばたきの音に似ていた。

『やれやれ……随分とおつかないご友人と喋っていたね』

やっと彼が話しかけてきた。

キーンと重圧がかかって、傍らに真っ黒なタキシード姿の黒髪の男が立っている。

目は茶色にも見えるが金色にギラギラと光っているようでもある。

座るといいです。

彼はくつろぎながら言った。

『血のしたたるグラスを』

彼は店主に注文する。店主は頷いて姿を消した。

私は香を出して火をつけた。

悪夢の香が煙を吐き出し、不思議な線を空間に描いた。

はつきりさせておきたいんですが、あなたは最近故意に出てきませんね？

私は煙を味わいながら尋ねた。

『だとしたら？』

彼は口元を緩く上げながら柔らかく答えた。

悲しいことです。

『何故だね？今までのやり方を捨て、新しいやり方を採るのが辛い

かね？』

やはり、そうでしたか。

ところで、さっきの本ですが……。

『御使いのことかい？ご友人と楽しそうに話していたことと通じるかも知れないな。何故なら、彼女を倒したい者は一人や二人ではなくなっている』

指名手配だからですか？

『約束を破り、マナーをわきまえない彼女は少し、やりすぎたよ』

彼は少し悲しげに笑った。

それで？御使いが裁きを下すんですか？

彼は頷いた。

『そうなるだろうな。いくら彼女が上手くやっても沢山の憎悪には彼女は勝てない』

憎悪？

『彼女に苛立っている者が大勢いるということだよ。支配された悪魔たちの票も数に入ればかなりになるだろう』

もしかして、あなたもその裁きに関わるんですか？

『ああ、多分そうなるだろうね……』

彼は金色の瞳でじっと私を見つめた。

店主がグラスを運んでくると彼はそれを飲み干した。口の端から真っ赤な血のようなものが伝わった。

夜闇にまぎれて歩いていると後ろから駆け足の音がした。

かなり息を切らせた男が私に迫いすがつてきた。

「た、助けてくれ！！」

「！！」

私の服をつかんだ男はそのまま地面に倒れこみ、しかしそれでも血走った目で私を見上げて喋った。

「助けてくれ！」

「その男を放しなさい」

すぐ側で男の声がした。

私は振り向く。

「やめてくれ、引き渡さないでくれ」

男は私にいいよいよすがりついた。

声をかけてきた者は黒っぽい服装で、片手に黒いステッキを持っていた。ステッキと見えたそれを男が振り上げると、それは鞭らしく、地面に座り込んだ男を打った。

男はギャツというような悲鳴を上げた。

「さあ、帰りましょう。あなたの愛しい方がお待ちですよ」

黒い服の男は口の端を釣り上げて地面に座った男の身体につま先をさしこんで小突いた。

「なにがあつたんです？」

私は二人の間に入って問うた。

座った男は私の陰に逃げ込もうとする。

「関わり合いになる必要はありません。さあ、立ち去ってください」

黒服の男はゆっくりといった。鞭が光った。

「！」

私が身をかわした空間へ鞭の先が伸びていた。

「いいでしょう、言いなさい、あなたの罪の数々を」

黒服の男は地面の男を鞭で数回打った。

男は悲鳴を上げながら、無理やり口をこじ開けられたかのように言った。

「俺はやってません！強姦なんかしていません！捕まらなかったからって繰り返してなんかいません！」

黒服の男は石でも眺める目で私を見、男を担ぎ上げた。

「さあ、帰りましょう」

「ちよつと待つてください」

「助けてやるつもりですか？この腐った魂と引換に？」

男は私を冷ややかに見返した。

「一つ聞きますが、あなたはこの人を罰するように頼まれたのですか？それでああなたは契約したんですか？」

「それには答えられません」

男は鞭を構えた。

「それとも戦って取り返しますか？」

私は身を引いた。

気がつくとも周囲に沢山の男たちが散らばって立っていた。

みんな同じような臭いを漂わせている。

「助けて……くれえ」

男はかすれ声で呟いた。

彼は小刻みに震えている。

「この人の罪がこれだけの契約を作ったのですか？本当に、あなたの分身ではなく？」

私は元の黒服の男に尋ねた。

「13の契約を生んだこの男の罪。この男には同じことを体験させても何も分からない。ですからこの男が最も嫌う形で罪を償わせる。それが我々の役目です」

地面の男が裸にされ、めちやくちやに切り刻まれる幻覚が生じる。

周囲を取り囲む男たちは黒い鳥に姿を変え、彼の肉をついばむ。

男の悲鳴が響く……。

「我々のもてなしはいずれこの男の精神、心、身体を破壊する。あとは汚れた魂を握りつぶすだけです……」

黒服は淡々と言った。

悪魔の好物と言われる一つである魂を握りつぶすとは。

「貴方がたは、悪魔としてはなにかおかしいです。なにか嘘を付いていますね」

男たちはげらげらと笑い出した。

「ご名答。それがなんだかは宿題です」

黒服が笑いながら言った。

気がつくともどりにには誰もいなかった。

助けを求めてきた男さえも。

『奴らの飼い主が彼女だよ。彼らは餌なしで使役され続けているのだ。言葉の外の助けを求める叫びが聞こえなかったかい？』

私に13の悪魔の相手をしろと？

『今のままでは無理だな。しかし、契約すればいい。逃れたがっている悪魔たちとね。そして、彼女を捕まえたら突き出せばいい。お触書が廻っている』

簡単に言いますね。

『簡単なことだ。彼女は君に14体目の下僕を求めるために契約に来る。契約をすればいい。その時が彼女の最期の時だ』

難しいことはあなたにお任せしますよ。

彼は楽しそうに笑った。

中立雑貨屋に行って血まみれの古本をめくっていると、見たことのある青年が近づいてきた。

「こんばんは」

「こんばんは。あなたはこの前の」

男は静かに羊皮紙を取り出した。

「ここに13の署名があります。どうぞよろしく」

「えっ」

「いい知らせを待っています」

私が羊皮紙に触れると、それは広がっていきなり燃え上がったように見えた。

何が起きたのか、羊皮紙は失せ、私は戸惑っただけだった。

薄暗い店の一角で以前太陽を食べると言っていた男が緑色の双眸でこちらを見ていた。

「ちよつと、いいかしら、あなた悪魔召喚師よね？」

いつの間にか立っていた女性は地味で元氣のない顔をした人だった。

「はい、召喚師のようなものです……」

私は答えた。

「じゃあ悪魔を呼んでもらえるかしら。殺したい奴がいるの」

「呼ぶのは構いませんが、悪魔はあなたの何かを要求してきますよ？ 魂や心や、記憶、美しさかも知れない、寿命かも知れない。あなたは悪魔の指定したものを差し出せますか？」

私は尋ねた。

「いいわ」

「そうですか。ここはいけませんから、外に出ましょう」
女性は頷いた。

私は香に火をつけた。悪夢の香が見てはいけない夢の音楽を奏でる。

煙の帯に取り巻かれた者は外へ出ていかなくなる。

「なぜ殺したいんです？」

私は尋ねた。

「私が憎んでも怨んでもそいつにはなんのダメージも与えられないからよ。私が最も恨んでいることはそいつにとって何でもないこと、思い出せもしない軽いこと。それが憎い」

「そうですか」

私は輪を投げる。光満ちる聖なる御名のサークルが女性の首にかかる。

そして足元に落ち、固定され、広がり、安全地帯の輪となる。

召喚師に降りた誰かは口元にゆったりした笑みを浮かべて女性を見返している。

「しかし、その殺したいほど憎い相手というのはもう捕らえて煮るのも焼くのも自在な立場にいるのではないのかね？なぜあんた自ら殺さないのだ？」

悪魔の余裕に女性は戸惑ったようだった。

「あなた悪魔なの？」

「いかにも。あんたが召喚するように頼んだのだろう？」

悪魔はゆつくりと答えた。

「それは……どうやってら一番いいか分からないから。殺したら終わりでしょう？でも悪魔に頼めばあの馬鹿なやつに思い知らせてやれるかも知れない。どうやってら一番やつが苦しむの？生まれたこと、やったこと全てを悔やませることが出来る？」

「レクチャーが望みなのかね？殺すことが望みなではなかったか？」

「勿論殺すこと」

「あんたはやつに直接手を下したくないということだね」

悪魔は腕を上げて、契約用紙を呼び出した。

「ここに紙がある。これにペンでサインしてくれたまえ。ペン先を手にあてればすぐに書ける」

「わかったわ」

「ところで、この契約であんたが差し出せるものは何かな？」

「魂が欲しいんじゃないの？もっと他のものもいいの？」

女性は眉を上げていった。

「あんたの魂はあまり欲しくない、というよりもっと磨かれるといい。もっといいものを貰うでしょう？」

「なに？」

女性は興味を惹かれたようだった。

「ふふつ。あんたが今一番大事に抱えているものだ。それがなにか

は失ってから気がつくといい」

「なによそれ。契約前にはつきりさせないなんて……」

女性は首を振った。「ま、構わないわ。魂より悪魔が欲しがるものなんてあるの？」

悪魔はニヤリとした。紙とペンを飛ばした。

女性はペン先で手を突き、少し顔をしかめて紙を広げるとそつとサインした。

「これでいい？」

「ああ、上等だ」

悪魔は紙から漂う血の香りを嗅いだ。

「それではよい人生を」

「あ……うう……？」

私は目を覚まし、周囲を見回した。大事なところで、何か忘れている。

近くに女性が立っていたので声をかける。

「契約は大丈夫でしたか？」

「ええ……でも……魂でない何かを盗られたわ。それがなにかよく分からないまま」

「そうですか……」

「ありがとう。さよなら」

「さようなら……」

女性は歩き出した。その背中が消えると、私は大事なことを思い出した。

彼女は現行犯逮捕されるのではなかったか。

なにがどうなっているのか解説してもらえませんか？

『ああ、あまりに彼女が面白かったのでやめてしまったよ。私は彼女のいないはずの魂は求めなかった。求めたのは……見るかい？』

こういう種類の問いに頷くところがないと分かっていたので私は首を振った。

結構です。あなたの悪趣味なコレクションなど見たくありません。

『あはは、鋭いね。そう悪趣味で興奮するものだよ。しかし嫌がるものを無理強いしてまでは見せるまい』

そうだ、私は使役されていた方々と約束があったんです。でも彼女がそのままならそれは果たせない……」

『果たせるよ、頑張りたまえ』

あっ！逃げるんですか。

彼は遠のいてしまった。

夜道を歩いていると黒服の男が手招いていた。

「こんにちは」

「いいですか。彼が殺されるようです。それで彼があなたに会いたいと」

「ああ、分かりました」

男について歩いて行くと、彼は以前の男の部屋へ私を連れて行った。中に入ると男は衰弱しており、ベッドに横になったまま私を見た。

「来てくれたな……。見たままだ、俺はもう殺される」

男はぼそつと言った。

「彼女を以前あなたは犯しましたか？」

私は念のために聞いた。

男は頷いた。

「女性の心の傷は深かったようです。その傷は育って彼女の心の闇となり、今ではもうあの人は心の中の光を失ったようですね」

「殺される……女を殺してくれ」

男はうつろな目で言った。

「例え、刺し違えるようなものだとしてもですか？」

「殺してくれ……」

「あなたが契約したいというならそうしましょう」

私が言うと黒服の男がすつと場所をあけた。

「いいんですか？」

男は静かに頷いた。

私は香を炊いた。炊いたところで、それがいらなかったことにも気がついたが、そのまま口にくわえていた。

悪夢の香が悪臭のする室内を埋め尽くす。

輪がベッドを取り巻いた。

そして輝く。

男に契約を頼まれた存在は赤く燃えるなにかを身に纏いながら男に契約用紙とペンを差し出していた。

男はサインをし、それらを手放した。

「ありがとうございます」

彼は目を伏せた。

「頂いたのは貴方の命でした。さようなら」

彼の悪魔が黒い姿でそつと男の目を手でふさいだ。

男は抗ったが意識が濁っているようで、その口元は楽しそうに歪んだ。

『いい夢を。さようなら』

悪魔が目をつさいだまま、片手で彼を撫でた。

彼の姿が二つに切断され、スライスされた食べ物のようにくたりと落ちた。

現実では彼は切られていなかったが、悪魔が手を離すと目をあけたまま事切れていた。

「こんばんは」

女性が扉を開けると悪魔召喚師が立っていた。

「あら、こんばんは」

彼女は彼の後ろに立つ者も目にした。

「あなたが憎んでいた男は死にました」

彼女の下僕は報告した。

「そう、苦しんだ？」

「楽しそうに笑って死にました」

悪魔召喚師は告げた。

「そう、じゃあゲームはおしまいね。ほら、あなた彼を帰らせてよ」

女性は下僕に言った。

「はい、分かりました。いますぐに」

男は頭を下げた。

召喚師は13の悪魔を解き放った。

女性はばらばらに引き裂かれた。

現実世界では女性は無傷で床に倒れ、動かなくなっていた。

私は帰りがけに緑の目の男を見つけた。

男は書類になにか書いていたが、それをしまいこんだ。

「お役目ご苦労様です」

私は声をかけた。

「カラスが飛んでいく」

彼が顎で指し、私たちは自由になった13体の悪魔が去っていくところを見た。

「人の命を願う以上、自分の命も取り上げられることはそれぞれ覚悟の上なんですよ」

「それが分かっているのが彼らだな。彼らは自分の頭の上に胸に自分の名前が掲示されていないと本気で信じている。実際は名札をつけて歩いているも同然なのにな」

彼は肩をすくめた。

「あなたは随分人間に理想を見ず、やたらと現実的ですネ」

「ここに長いからな。キラキラと純粋な頃は過ぎたよ」

私は苦笑した。

「そうでもありませんよ、あなたは相変わらず真っ白で光り輝いている。太陽のように」

「ふん。君も気をつけることだな。過ぎたるは及ばざるが如しだ」

「気をつけます」

そんな二人を召喚師の呼ぶ悪魔は眺めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7696o/>

悪魔召喚師 3

2010年11月7日20時38分発行